《調査》

「源氏物語図屏風」（個人蔵）の紹介

―伝狩野常信筆「源氏物語絵巻」（同志社大学蔵）との関係―

岩坪　健

本稿で紹介する旧家御所蔵の「源氏物語図屏風」は六曲一双の屏風で、左右隻とも縦一二二・二センチ、横二七七・二センチである。画面は金地に絹本着色、絵は各隻とも九図ずつ計十八図が描かれている。各隻とも第一・二扇、第三・四扇、第五・六扇に三図ずつあり、各図は金雲で分けられほぼ等間隔に配置されている。印章も落款もなく何れが左隻か分からないが、桐壺の巻が第一・二扇の上段にある方をひとまず右隻と見なすと、以下のようになる［図ア・イ］。なお巻名の上の洋数字は巻数を表し、続いて場面の簡単な説明、次いで（　）内に当該箇所を新編日本古典文学全集の冊数と頁数で示し、末尾にその個所の季節か月を記す。

第一図、右隻第一・二扇上段、1桐壺。鴻臚館にて源氏の観相（①三九頁）季節不明。

第二図、右隻第一・二扇中段、19薄雲。明石の君、姫君を手放す（②四三三頁）十二月。

第三図、右隻第一・二扇下段、13明石。源氏、明石の君に会う（②二五五頁）八月。

第四図、右隻第三・四扇上段、6末摘花。朱雀院への行幸の準備（②二八七頁）八月。

第五図、右隻第三・四扇中段、35若菜下。女楽（④一八五頁）一月。

第六図、右隻第三・四扇下段、9葵。車争い（②二二頁）四月。

第七図、右隻第五・六扇上段、48早蕨。薫、宇治を訪問（⑤三五六頁）二月。

第八図、右隻第五・六扇中段、15蓬生。源氏、末摘花と再会（②三四七頁）四月。

第九図、右隻第五・六扇下段、51浮舟。匂宮と浮舟、舟で宇治

川を渡る（⑥一五〇頁）二月。
第十図、左隻第一・二扇上段、10賢木。源氏、野宮を訪問（②八四頁）九月。
第十一図、左隻第一・二扇中段、27篝火。源氏、篝火の和歌を玉鬘と詠む（③二五六頁）七月。
第十二図、左隻第一・二扇下段、14澪標。源氏、住吉参詣（②三〇六頁）秋。
第十三図、左隻第三・四扇上段、33藤裏葉。朱雀院と冷泉帝、六条院に行幸（③四六〇頁）十月。
第十四図、左隻第三・四扇中段、45橋姫。薫、宇治の姉妹を垣間見る（⑤一三九頁）九月。
第十五図、左隻第三・四扇下段、16関屋。源氏と空蝉の一行、逢坂の関ですれ違う（②三六〇頁）九月。
第十六図、左隻第五・六扇上段、50東屋。左近少将、常陸介の娘と結婚（⑥三八頁）八月。
第十七図、左隻第五・六扇中段、43竹河。薫と蔵人少将、詠み合う（⑤九二頁）四月。
第十八図、左隻第五・六扇下段、12須磨。源氏、須磨の海を眺める（②二〇〇頁）八月。
通観したところ巻の順でも季節の順でもなく、また重複する巻もない。

一図ずつ考察するにあたり、本屏風絵と似た作品が二件ある。一つは山本春正が本文を校訂して絵も描き承応三年（一六五四）に刊行した絵入源氏物語（以下『春正』と略称）、もう一件は同志社大学所蔵「源氏物語絵巻」二巻（721.2/G10216）である。当絵巻は外題も内題もないが内容は源氏絵で、全五十五図からなる。上巻の第一紙は書物や硯・墨と筆・筆立てを置いた机に女君が向かう図（石山寺に籠る紫式部か）で、左下に「常信筆」と墨書されている［図ウ・エ］。この落款が狩野常信（生没一六三六～一七一三年）のものならば江戸幕府に仕えた御用絵師で、一六五〇年に父尚信が没したため十五歳で木挽町狩野家を継いだ、狩野家四大家の一人である。以下、本作を『常信』と略称すると、『常信』上巻の第二紙から下巻末までは源氏絵が一帖につき一図ずつ描かれ、詞書はない。上巻は1桐壺から27篝火の巻、下巻は28野分から54夢浮橋の巻までである。各図の左端には「壱きりつほ」のように巻数と巻名を記すが、「廿六常夏」図は25蛍の競馬、「四十六椎か本」は45橋姫の垣間見の場面を描く。よって26常夏・46椎本の図はなく、代わりに25蛍・45橋姫が二図ずつある（詳細は（注11）参照）。なお「廿六常夏」の「常」と落款「常信筆」の「常」とは書体が異なる［図オ］。保存状態は良好で、本紙は縦二六・六センチ、横は上巻の第一紙のみ四二・八センチ、他は四二・三センチで

ある。紙本淡彩で、着色は心覚えのためか部分的に塗られ植物の描写などは丁寧であるので副本、または注文主に見せるためのサンプルかと推測される（佐野みどり氏の御教示による）。

次に個人蔵「源氏物語図屏風」の全図（以下、本図と呼ぶ）を第一図から順に取り上げ、『春正』『常長』と比較する。物語本文は新編日本古典文学全集により、主語などを適宜（　）内に補う。なお本稿の末尾に本図と、それに対応する『常長』をすべて掲載する。

第一図。鴻臚館にて高麗の相人が、右大弁に連れられた源氏を観相する場面。よく取り上げられる名場面だが、源氏の前に献上品が置かれているのは珍しい。これは物語本文の「（高麗人が源氏に）いみじき贈物どもを捧げたてまつる」に該当する。また、源氏は繧繝縁に座っているが、その畳はもともと天皇専用で、後に上皇や東宮、親王などにも用いられた。源氏は親王宣下を受けていないし、そもそも源氏を「右大弁の子のやうに思はせて」連れてきたのであるから、繧繝縁はふさわしくない。『常信』は室内に三人が床に座り、『春正』は源氏にのみ藁蓋（わらふだ）を設ける。他の絵では源氏・右大弁と高麗人の三人しか室内にいない図様が多いが、本図では更に冠姿が二人もいるので、「いみじう忍びてこの皇子を鴻臚館に遣はしたり」という、父帝の意図に反する。また床の石畳も瓦も多彩に塗られ、高麗人がひれ伏すほど背を曲げているのも珍しい。よって本図はよく取り上げられる場面ではあるが、描き方に目新しさが散見される。似た図として、「源氏物語絵巻　湖水五十四帖」（十七世紀、石山寺蔵）[1]が挙げられ、当絵巻は「土佐派、住吉派、狩野派などという流派に帰結せず、無名の町絵師によって制作されたと推定され」[2]ている。両作品とも瓦と石畳がカラフルであり、室内にいる人の配置も似ている。

第二図。源氏が明石の姫君を引き取りに来た場面。迎えの車に、「母君（明石の君）みづから（姫君を）抱きて出でたまへり」と本文にあるので、先頭に立ち女子を抱きかかえているのが明石の君であろう。ただし、女主人ならば身につけない裳を明石の君が着用しているのは、源氏に敬意を表するためか[3]。後方の女性が手に持つのは、源氏が贈った守り刀と思われる。本文にも、「乳母、少将とてあてやかなる人ばかり、御佩刀（はかし）、天児（あまがつ）やうの物取りて乗る」とある。源氏の姿が見えないのは、車内にいるからであろう。『常信』は屋外の家来を除くと本図とほぼ同じになり、女房は刀と天児を持つ。なお女性の額髪を見ると『常信』は垂れているのに対して、本図は目鼻に向かって伸びているかのように描かれ、その特徴は他の図にも見られる。

第三図。源氏が初めて明石の君を訪ねる道中で、当巻を代表する名場面である。源氏の一行は、波の向こうに見える明石の

君の邸宅を眺めているかのように見える。ただし本文には、「道のほども四方の浦々見わたしたまひて、思ふどち見まほしき入江の月影にも」としかなく、屋敷には言及していない。『常信』は源氏が先頭に立つが、多くの絵は本図のように刀を肩に置く少年または家来が先導している。『常信』とは波を挟んで源氏一行と建物を配置する構成が似る程度で、『春正』は家がなく代わりに月が浮かぶ。手前から人・波・家を置く組み合せは、14澪標の『春正』第一図（源氏の使者が明石の君邸を目指す）にも見られる。

第四図。貴公子たちが舞楽の稽古をしている場面で、本文は以下の通りである。

行幸のことを興ありと思ほして、（左大臣邸に）君たち集まりてのたまひ、おのおの舞ども習ひたまふを、そのころの事にて過ぎゆく。物の音ども、常よりも耳かしがましくて、方々（かたがた）いどみつつ、例の御遊びならず、大篳篥、尺八の笛などの大声を吹きあげつつ、太鼓をさへ高欄のもとにまろばし寄せて、手づからうち鳴らし、遊びおはさうず。

（②二八七頁）

いつもは昇殿を許されない地下の者が受け持つ太鼓を、青年貴族が欄干のもとに寄せて楽しむ様が描かれている。この場面は田口榮一氏「源氏絵帖別場面一覧」[4]にも見えず、作例は伝住吉如慶筆「源氏物語画帖」の白描画[5]のほか、『常信』『春正』に見られる。本図から琴を弾く人を省略すると『常信』になる。また、横笛を吹く人と篳篥の人との位置関係は、本図と『常信』『春正』に共通する。なお十月十余日の行幸に備えての準備で、当該箇所は八月二十余日以後のことであるが、本図の庭に咲く木は桜に見える。

第五図。六条院にて女三の宮は琴（きん）、明石の女御は箏、紫の上は和琴、明石の君は琵琶を演奏している女楽の場面。『常信』『春正』も含め他の作品では、女三の宮・明石の女御・紫の上の三人は並び、その向かい側に明石の君と源氏が対坐するという構成を成すのに対して、本図のように明石の君のほかにもう一人が源氏側に座る例は稀である。

第六図。有名な場面でバリエーションに富むが、本図から車争いに関わらない五人を除くと『常信』の図になる。その五人のうち、垂直にかぶる烏帽子が金雲のため斜めになっている者がいる。また右手に扇を持ち制止している男の足元に注目すると、『常信』は両足が見えているが、本図は左足が金雲に隠れて見えず、それにより動きが感じられる（河田昌之氏の御教示による）。

第七図。中の君が上京する前日、薫が宇治を訪ね、庭の紅梅の香りを詠み合った場面。二人が話し合う直前を描いた図なら

ば他にも作例はあるが、当該場面は管見の限り『常信』『春正』しかなく本図に似通う。物語本文では二人は襖を隔てているが、本図も『常信』『春正』も二人の間に何もない。

第八図。本図だけではどの場面か分かりにくいが『常信』に同じ図があり「十五蓬生」と記されているので、源氏の一行が末摘花を訪れた場面と判断される。物語本文には「御かささぶらふ」と惟光が源氏に話しかけ、絵もそれに合わせて傘を描くことが多いが、本図も『常信』『春正』も傘はない。また本図も『常信』も先導する惟光は源氏を見ているが、『春正』のように振り返らず前を見る方が多い。『春正』は本文に合わせて松に藤を描くが、本図と『常信』は松のみで藤はない。また物語では末摘花の邸宅は荒れ庭には蓬が生い茂っているのに対して、本図と『常信』が廃屋に見えないのは、ことによると婚礼調度として誂えられたからかもしれない。

第九図。匂宮が浮舟を連れ出し、舟で宇治川を渡る場面で、室町時代から描き継がれてきた。本図と『常信』は似るが、『春正』は物語本文に合わせて侍従も添える。

第十図。源氏が野宮にいる六条御息所を訪れた場面。本文には「黒木の鳥居ども」とあるが、本図の鳥居は白木である。これは手本の写し間違い、あるいは着色されていない粉本の類いによるからであろうか。『常信』は本図に似るが黒木、『春正』は構図からして本図と違うが、鳥居には細かく線が引かれ朱塗りではないことを示す。

第十一図。源氏が玉鬘の部屋を訪ねた場面。本文には「けしきことに広ごり伏したる檀（まゆみ）の木の下に、打松（うちまつ）（篝火にたく松の割木）おどろおどろしからぬほどに置きて」とある。檀の葉の形は楕円形であるのに対して、本図のものは葉が掌状なので楓（かえで）であろうか。物語では七月であるが、本図では紅葉している。『常信』の木は楓には見えず、『春正』のは判別しにくい。また、室内で源氏に向き合う玉鬘の両袖が、本図と『常信』では舞い上がっているかのように見える。翻る袖は『春正』では五節の舞姫（少女の巻）に見られる程度であるが、「源氏物語絵巻」須磨・明石の巻（丹波篠山市立歴史美術館蔵）では散見される。(6)

第十二図。源氏の住吉詣。この場面はよく取り上げられるが、画面の左下で楽人たちが演奏している様は珍しく、『常信』にも添えられている。物語本文にも「楽人十列（がくにんとをつら）など装束をととのへ容貌（かたち）をえらびたり」（②三〇二頁）とあるが、それは住吉の社前で舞楽を奉納するためである。本図のように惟光が車内にいる源氏に「懐に設けたる柄（つか）短き筆など」を渡したのは、その翌日に住吉を出立して難波でお祓いをしたときであり（②三〇六頁）、『春正』には楽人は描かれていない。なお本図にのみ

太鼓が描きこまれ、逆に明石の君の舟は見えない。

第十三図。六条院に朱雀院と冷泉帝が行幸した場面。本文に、

池の魚を、左少将とり、蔵人所の鷹飼の北野に狩仕まつれる鳥一番を、右の少将捧げて、寝殿の東より御前に出でて、御階の左右に膝をつきて奏す。太政大臣仰せ言賜ひて、調じて御膳にまゐる。（③四六〇頁）

とあるように、階段の両脇には右少将が二羽の鳥、左少将が魚（ただし魚の形ではない）を入れた箱を持っている。室内にいる四人のうち、端近にいるのが太政大臣であろう。本文に「御座二つよそひて、主（源氏）の御座は下れるを、宣旨ありて直させたまふ」とあるので、一番奥にいるのが朱雀院、手前の二人のうち顔が見えないのが冷泉帝、全身露わなのが源氏であろう。『常信』は朱雀院の繧繝縁の配置や畳の置き方が本図と異なる以外は似ている。『春正』は太政大臣を省く。物語では十月であるが、本図の庭に咲く木は桜か。ただし第四図に添えられた桜は赤い葉も見えるが、本図は白い花しかない。『常信』のは若葉が薄紅色に萌え出た桜であろう。

第十四図。薫が宇治の姉妹を垣間見る場面。国宝「源氏物語絵巻」以来、描き継がれ変化に富むが、本図全体の構図は『常信』と同じである。物語と『春正』では月が出ているが、本図と『常信』には月は見えない。物語では「雲隠れたりつる月のにはかにいと明くさし出でたれば」（⑤一三九頁）とあり、それを受けて姉妹の会話が始まる。このように重要なモチーフである月を欠くのは、「雲隠れ」の様子を描写したか、あるいは描き落としであろうか。

第十五図。逢坂の関で源氏と空蝉の一行がすれ違う場面。門の傍らにある木の花は第十三図にも見られる。本図と『常信』は女性を描かない等の点は一致するが、図様などは異なる。また『常信』と『春正』では関所の門の上の横木に鋸歯のような物が見られるが、本図の門には横木がない。

第十六図。『常信』と『春正』に同じ図があり、常陸介の娘が左近少将と結婚する場面であるが、田口榮一氏「源氏絵帖別場面一覧」（注（4）に同じ）には掲載されていない。紫式部の頃は新郎が新婦のもとに三日間通い、三日目の夜に両人は三日夜の餅を食べた。ところが院政期になると一晩通えば結婚は成立するようになり、[7]三日夜の餅が不要になると実態が分からなくなった。本図は三方が三個あり、冠を被った左近少将の前にあるのは簾に隠れて見えないが、奥にいる新婦の前には胡粉で粒々まで描いた白飯が器に盛られている。手前の女房（「乳母」（⑥三八頁）か）の前に置かれた三方には金で縁取られた朱色の盃と、白い粒々の固まりの上に焦げ茶色の帯状のような

物が見える。[8]

第十七図。傷心の薫が藤侍従と語る場面。物語本文の一節、「（薫は）藤侍従と連れて歩くに、かの御方（大君）の御前近く見やらるる五葉に藤のいとおもしろく咲きかかりたるを、水のほとりの石に苔を蓆（むしろ）にてながめゐたまへり」を絵画化している。薫は大君（玉鬘の娘）に求婚したが叶わず、藤侍従（玉鬘の子息）は薫に同情している。場所は玉鬘の邸内であるので、本図で冠をかぶるのは薫、烏帽子は藤侍従であろう。『常信』と『春正』は二人とも烏帽子である。

第十八図。源氏が須磨の海を眺める場面。物語本文には、「前栽の花いろいろ咲き乱れ、おもしろき夕暮れに、（源氏が）海見やらるる廊に出でたまひて、たたずみたまふ（中略）沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ」とある。本図と『常信』では建物の角度は異なるが、画面手前に小屋と紅葉した木々、渚に岩を配置する点は共通する。本文の「雁の連ねて鳴く」に合わせて『常信』は雁を描き込むが、本図には見られない。

以上をまとめると本図に近似するのは『常信』が計十一図（第二・四、六～十一、十四・十六・十八図）、『春正』が計三図（第七・十六・十七図）、類似するのは『常長』が計二図（第十二・十三図）になる。それ以外の絵も描き方は異なるが、同じ場面が『常信』にも『春正』にも見られる。『春正』は全二二六図もあるのに対して、『常信』は五十四図しかない。本図は全十八図からなり、そのうちの十三図が『常信』に似るのは偶然ではなかろう。また本図が『常信』にも『春正』にも似通うのは第七・十六図で、いずれも田口榮一氏「源氏絵帖別場面一覧」には見られない。この独自場面を含む本屏風には、狩野派と山本春正の画風が混在していると言えよう。春正は蒔絵師・地下歌人・国学者と多彩で、絵を誰に師事したかは不詳であるが町絵師と見なせよう。

本屏風については河田昌之氏から、次のような御教示をいただいた。

人物の衣紋線に見られる筆の打ち込み（書の起筆のような力強く筆を入れる時に生じる部分）や人物の顔貌から狩野派の作風が感じられる。金雲の周囲を胡粉で盛り上げて金箔を施す手法は江戸時代前期から見られるが、金雲の凹凸が画一的で形にメリハリがない。屏風に図を配置する形式と人物や樹木などの作風、金雲の形を併せて推測すると、狩野派の作画を学んだ町絵師による十八世紀後半の作品と見受けられる。

金地で雲形の間に場面を配置する形式が似通い、画像配

置が似ているものとして、林原美術館所蔵の源氏物語図屏風が挙げられる。狩野永良の落款と印章があり、京狩野の絵師による十八世紀の源氏絵である。

『常信』は第一紙に常信の落款があり、第二紙以下も常信筆か否かは今後の研究に俟つが、狩野家ゆかりの品と見てよかろう。その作風が町絵師にまで伝わったことが確認される。

『常信』と同じ絵巻は三件、確認される。一件は早稲田大学所蔵九曜文庫蔵「源氏物語絵」一帖（文庫30_b0372）で奥書などはなく、江戸末期写と見られ五十四図揃いである。[9] 二件めは龍谷大学図書館蔵「源氏物語絵巻」（022.1-205-1）で、巻末に「文化二年冬日　光貞」と墨書され、「筆墨／生涯獨／善身」の朱印が押されている。それによれば土佐光貞（生没一七三八～一八〇六年）が文化二年（一八〇五）に写したものである。[10] 三件めは鶴見大学蔵「源氏五十四帖絵巻」三軸（913.365K）で、上巻の第一紙に「源氏五十四帖　探幽」、第二紙に「五十四帖／引哥／山路露／系図／爪印上／同　中／同　下／以上六十帖／探幽法印筆／天保二卯年十月中旬／幽遠斎写之（印）」とある。それは当大学での貴重書展示に何度か出陳され、第一三六回「源氏物語の和歌」（二〇一四年一～二月）の際の高田信敬氏の解説の一部に、

上巻冒頭に厚手楮紙（幅約5糎）を加え、「源氏五十四帖探幽」と墨書する。この部分は汚れ・手択が目立つので、元表紙の一部か端裏書を張（ママ）り継いだと推される。

とある。また『鶴見大学特定テーマ別蔵書目録集成』3（一九九三年三月）三九頁にも取り上げられ、高田信敬氏の解説を全文引用する。

狩野探幽（一六〇二～一六七四）の原本を天保二年（一八三一）に模写したとするが、源氏物語一帖一図方式の掲出本と一致する探幽の源氏絵は見当らない。夕顔・野分を除く五二帖分はすべて慶安三年（一六五〇）山本春正刊源氏物語の挿絵中に収まる。同時代の出版物を狩野派の名手がわざわざとり上げるのも不審であり、親本筆者を探幽とするのは無理であろう。幽遠斎の伝記もよくわからず、都立中央図書館加賀文庫の『椿図』の作者でもあることを知りえたのみ。上巻一三図、中巻二〇図、下巻二一図で、中巻に絵の順序の乱れあり、[11] また下巻では橋姫に二図あって椎本の分を欠く。慶安版本登場人物の増減、構図の左右反転など、随所に工夫が見られ、特に原拠本の縦長画面を横長に組みかえ、狩野派得意の風景画を展開してゆくあたりは見事である。

右記の文中に挙げられた探幽と山本春正刊（『春正』と同書）を、それぞれ『常長』と比較する。まず狩野探幽の源氏絵とい

うと、探幽筆「源氏物語図屏風」（宮内庁三の丸尚蔵館蔵。以下『探幽』と略称）が有名である。それを『常長』と比べると、高田信敬氏が指摘された通り殆どの巻は場面が違うか、同じ場面でも描き方が異なり、似ているのは帚木・須磨の巻ぐらいである。注目されるのは高田氏が『春正』の挿絵中に収まらない、とされた4夕顔である。『常長』も『探幽』も源氏が夕顔を連れ出して某の院に到着し、まだ車内にいるところである。田口榮一氏「源氏絵帖別場面一覧」（注（4）に同じ）、龍澤彩氏「源氏絵場面一覧」[12]にも『探幽』しか掲載されていない。両図とも牛を外していて、そのままでは車体は傾くので『常長』は軛（くびき）を簀子に載せている［図カ］。一方『探幽』は轅（ながえ）（長柄）の片方が簀子に置かれているので車両は水平を保っているのかもしれないが、まるで赤い紐を結んだ軛が宙に浮いたかのように見えなくもない。その不自然さを解消するため、『常長』のような図様になったのかもしれない。

次に『常長』と『春正』を見比べると、両者の場面が異なるのは高田氏が示された4夕顔・28野分のほかには次の三巻しかない。その相違点を『春正』『常長』の順に挙げると、2帚木（雨夜の品定めで源氏・頭中将のみ―左馬頭と藤式部丞も加わり四人）、5若紫（僧都と聖、源氏に贈物をする―北山で合奏）、18松風（明石の君と尼君―源氏と明石の君）であり、同じ場面とも捉えられるが両者には時間の差がある。それ以外の四十九帖のうち酷似するのは十四帖、似た図は九帖にも及び、そのうちの六帖は第一部（1桐壺～33藤裏葉）で、殆どは第二・三部に集中している。この中で田口榮一氏「源氏絵帖別場面一覧」に見られないものは五図あり、巻の順に列挙して『春正』の第何図か（例えば(1)は第一図）を示すと、31真木柱(4)・36柏木(4)・48早蕨(2)（本図の第七図）・50東屋(2)（本図の第十六図）・52蜻蛉(1)である。このように『常長』の半数近くが『春正』に似るのは一方が他方を参照したか、あるいは同一または類似の粉本等をそれぞれ取り入れたと想定される。狩野家伝来と思われる『常長』の絵と、蒔絵師を本業とする山本春正が手掛けた挿絵とが何故に深く関わるかについては、今後の研究課題としたい。

［付記］

調査・撮影・掲載を許可していただきました御所蔵者様、また御教示を賜りました佐野みどり先生と河田昌之先生に、この場をお借りして深謝いたします。

本稿は、「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（同志社大学人文科学研究所第21期研究会第6研究（二〇二二～二〇二四年度）、科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二

三年度）における研究の一部であり、また同志社大学宮廷文化研究センターの事業の一環である。

注

（1）佐野みどり氏監修・編著『源氏絵集成【図版編】』（藝華書院、二〇一一年一月）所収。

（2）エステル・レジェリー"ボエール氏「絵の中の絵―源氏湖水絵巻をめぐって―」二一三頁、佐野みどり氏監修・編著『源氏絵集成【研究編】』（藝華書院、二〇一一年一月）所収。

（3）女楽の場面（本屏風の第五図）においても、明石の君は「羅（うすもの）の裳はかなげなるひきかけて、ことさら卑下したれど」（④一九三頁）とある。

（4）秋山虔氏・田口榮一氏『豪華［源氏絵］の世界　源氏物語』（学習研究社、一九八八年六月）所収。

（5）『伝住吉如慶筆　源氏物語画帖：全五十四作』（アイ・イー・アイ　アートギャラリー、一九九二年）。

（6）岩坪健「〈資料紹介〉丹波篠山市立歴史美術館蔵「源氏物語絵巻」須磨・明石の巻」（『同志社国文学』第九一号、二〇一九年一二月）。同「狩野典信原画・橋本栄保模写「源氏物語絵巻」須磨・明石の巻（丹波篠山市立歴史美術館蔵）の紹介―土佐光貞「源氏物語須磨図絵巻」（ハーバード大学美術館蔵）と住吉廣行「源氏物語須磨巻絵巻」（斎宮歴史博物館蔵）との関わり―」（『人文学』第二〇五号、二〇二〇年三月）。

（7）大江匡房（生没一〇四一～一一一一年）が著した有職故実書『江家次第』に、「近代露顕（ところあらはし）一夜也。仍無二後朝使一云々」とある。

（8）本図では朱色の盃と白い塊に見えるが、本来は紅白の餅だったかもしれない。南北朝時代に編纂された源氏物語の注釈書『河海抄』には「三日夜餅は白一色」とあるが、『古事類苑』礼式部十四・婚嫁三に収められた「山科家雑記」文明十三年（一四八一）二月十七日の記事には「三日のいわゐ、あかきもちい、しろきもちい」とあり、紅白の餅が用意されたことが知られるからである。

（9）本画帖は早稲田大学図書館古典籍総合データベースに全図掲載。

（10）当絵巻は龍谷大学図書館貴重資料画像データベースに掲載され、21少女～54夢浮橋の巻のみ現存する。21少女と25蛍のみが入れ替わっていて、巻頭図は「廿一蛍」、次いで「廿二玉蔓」「廿三初音」「廿四胡蝶」「廿五乙女」「廿六常夏」と続く。

（11）当絵巻は鶴見大学図書館編『源氏五十四帖絵巻で見る源氏物語』（一九九二年一一月）にオールカラーで全図掲載され、場面の説明が付けられている。それによると『常信』の「廿五蛍」図を26常夏で雲居雁が昼寝を咎められた箇所、「廿六常夏」図を25蛍の競馬の場と判断されたため、この二図だけ巻の順が逆になり、解説に「中巻に絵の順序の乱れあり」と書かれたのであろう。たしかに常夏の巻にも「（雲居雁は）扇を持たまへりけるながら、腕を枕にて」（③二三八頁）と扇が見られる。しかし、「廿五蛍」図を蛍の巻で源氏が玉鬘を訪ねたところ、あるいは蛍は見えないがその光で顔が見ら

れないよう「（玉鬘は）扇をさし隠したまへる」（③二〇〇頁）の箇所と推測すると、両図とも蛍の巻になり、絵の順序の乱れはなくなる。

（12）龍澤彩氏『絵巻で読む源氏物語―毛利博物館所属「源氏物語絵巻」』（三弥井書店、二〇一七年三月）所収。

（第21期第6研究会による成果）

図ア　右隻

図イ　左隻

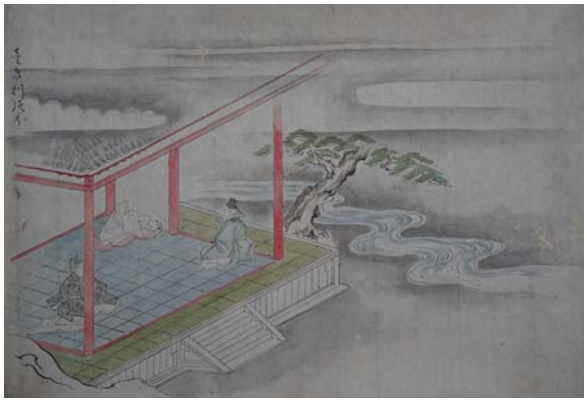
図ウ

図エ

図オ

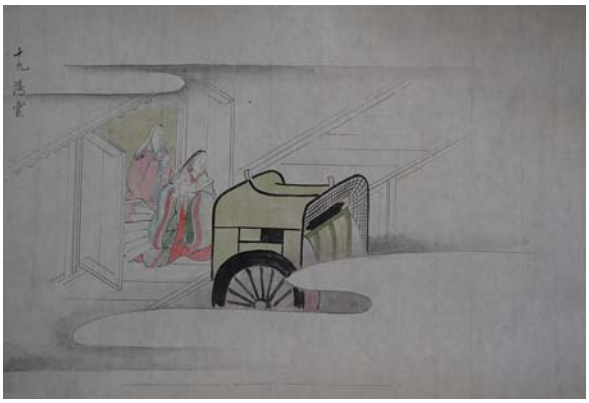
図カ　『常信』４夕顔

第一図　1桐壺



『常信』1桐壺

第二図　19薄雲

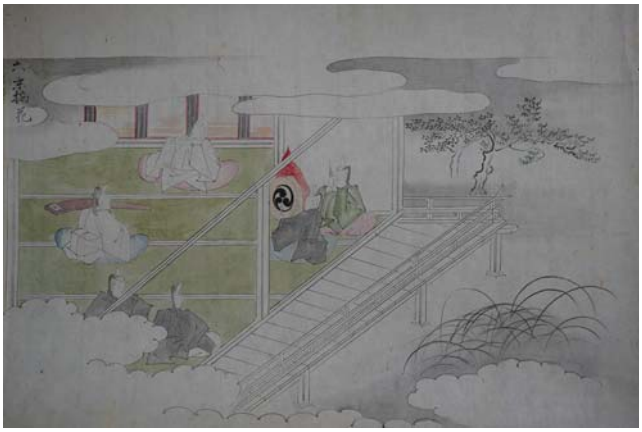


『常信』19薄雲

第三図　13明石

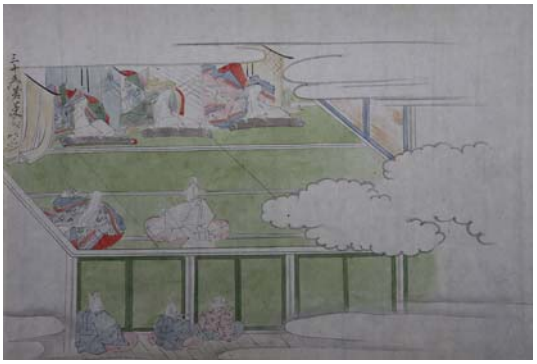
『常信』13明石

第四図　6末摘花



『常信』6末摘花

第五図　35若菜下



『常信』35若菜下

第六図　9葵

『常信』9葵

第七図　48早蕨

『常信』48早蕨

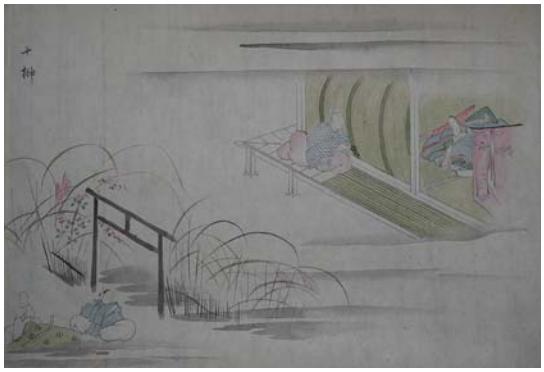
第八図　15蓬生

『常信』15蓬生

第九図　51浮舟

『常信』51浮舟

第十図　10賢木



『常信』10賢木

第十一図　27篝火

『常信』27篝火

第十二図　14澪標

『常信』14澪標

第十三図　33藤裏葉

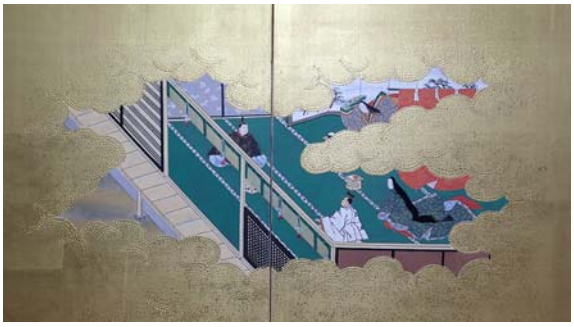
『常信』33藤裏葉

第十四図　45橋姫

『常信』45橋姫

第十五図　16関屋

『常信』16関屋



第十六図　50東屋

『常信』50東屋

第十七図　43竹河

『常信』43竹河

第十八図　12須磨

『常信』12須磨